

鳥インフルエンザのパンデミックと動物園研究

松井桐人

(横浜市立野毛山動物園)

2022 年秋に神奈川県で保護されたハヤブサから高病原性鳥インフルエンザ (HPAI) ウイルスが検出された件を今季の初めとした野鳥からのウイルス検出は、2023 年 3 月末までに 234 件 (1 道 27 県) を数え、家禽は約 1,700 万羽 (26 道県 82 事例) が殺処分となり、4 月に入ってから検出例が見られている。日本の国外の地域では通年の感染例があり、季節性という特徴は変化していると考えられ、国内でも最近 1 年間では感染の検出が途切れた期間は以前と比較して非常に短かったことから季節性の流行ではなくなる可能性がある。家禽の感染例からはウインドレス鶏舎など隔離型のシステムで防御できていない傾向が見られ、動物園等での感染例も見られたことから、家禽や動物園等の飼育方法について考察した。また、COVID-19 や HPAI などのように他の新興感染症のパンデミックが今後も発生する可能性があることから、動物園等の施設や参加型教育プログラムなどのデザインがどのように変化していくのか、動物園等の意義や社会との関係の変容などを客観的に研究する動物園研究について紹介する。